三　青谿書院時代(一)

三十四歳の時、生まれ育った宿南の地に青谿書院を建てた。そして、亡くなる六十六歳までそこを離れることなく、家族や地域の人たちと暮らし、自らの修養に励み、多くの志ある塾生を育てた。

青谿書院偶題

山陰總是山
吾里在其間
去里數百武
一谿殊幽閑
我来結茅宇
蕭然瓢與簞
所事只琴書
倦餘或倚欄
孤松窓外聳
細泉簷下流
涼風度樹杪
林禽囀素秋
周圍皆山嶽
隠映更一川
白沙連青野
草中起人煙
我曽攬此勝
風月已幾年
世縁日以隔
興味愈可憐
携童歩苔徑
焚香坐山窓
夙志慕前哲
高尚追遐踪
嗟夫拔群士
作事不癡頑
出世不意得
入山早閉關
我亦不遇者
役々竟何爲
行藏有典刑
巻舒宜隨時

青谿書院の詩

山陰は総て是れ山
吾が里は其の間に在り
里を去ること数百武
一谿殊に幽閑なり
我来たって茅宇を結び
粛然たり瓢と簞と
事とする所は只琴書のみ
倦余には或いは欄に倚る
孤松窓外に聳え
細泉簷下に流る
涼風樹杪を渡り
林禽素秋に囀る
周囲は皆な山嶽
隠映す更に一川。
白沙青野に連なり
草中に人煙起る
我曽て此の勝を攬る
風月已に幾年ぞ
世縁日に以て隔たり
興味愈憐れむべし
童を携えて苔径を歩し
香を焚いて山窓に坐す
夙志前哲を慕い
高尚遐踪を追う
嗟夫拔群の士
事を作して痴頑ならず
世に出づるも意を得ず
山に入りて早に関を閉づ
我も亦遇わざる者
役々として竟に何をか為す
行蔵典刑有り
巻舒宜しく時に随うべし

青谿樵夫

【訳】

青谿書院のこと

この山陰地方はどこにいっても山である
私の住む里はその中にある
里から少し離れたところに
一つの谷があってそこはとても静かなところだ
私はここに来て、茅葺きの家を建てた
物静かに質素な生活をしている
大事にしているのは琴とか書物とかだ
読書に疲れると窓際にいってみる
一本の松が高くそびえ
水の小さな流れが家のそばを流れ
涼しい風が梢を吹いている
小鳥が秋が来てさえずっている
周りはみな山で
その間を流れる川は見え隠れしている
川辺の白い砂は野山の緑とに連なっており
野からは煙が立ち上ってくる
私がこのすばらしい景色を選んで住んでから
風や月を楽しみながらもう何年も過ぎた
世間とは日ごとに隔たりができ
自分の楽しみはますます味わいが深まる
塾生を伴って苔のあるような小さな道を歩き
線香を立てて静座をする
早くから志を立て先賢を慕い
高尚な心で昔の人の跡を追った
ああそのすぐれた人たちは
何をしても愚かでなく　またかたくなでなく
世に出ても意のままにならないようだと
山に入り門を閉じた暮らしをした
私もまた世間にはあわない者だ
あくせくしてついに何ができるというのか
これからの身の施し方や
生き方は時にしたがっていく

青谿の樵夫

松風洞

高向樹邊開小洞
洞中終日只松風
外間人事君休語
老子近来耳病聾

松風洞（しょうふうどう）

高き樹辺に向かって小洞
洞中終日只（ただ）松風
外間の人事君語（かたる）を休め
老子は近来耳聾（ろう）を病む

【訳】

松風洞

高く伸びる木々の辺に小さな部屋がある
部屋の中は、一日中風が吹いている
世間の事など、聞かせてくれるな
私は近頃年老いて耳が遠くなった

※塾生が増えてきて、寮を二棟建て増した。そのうちの一棟の二階を「松風洞」と名付け、自分が静かな時間を過すために使った。時には来客のための応接室にもなった。

青谿偶題

溪山一幅好圖
風光千古勝情
早年已謝塵緣
獨立永守幽貞
澹々遠村雨色
潺々前溪水聲
幽人佇立良久
此間有情無情

青谿偶題

溪山は一幅の好図
風光は千古の勝情
早年にして已に塵緣（じんえん）を謝し
独り立つ永く幽貞を守り
澹々（たんたん）として遠村の雨色
潺々（せんせん）として前溪の水声
幽人佇立（ちょりつ）するはやや久し
此の間情有り情無し

塵緣＝ジンエン　世の中の関わりあい　澹々＝タンタン　淡々
潺々＝センセン　さらさらと流れる水の音　佇立＝リョリツ　ただずむ

【訳】

青谿のこと

谷や山は一幅のよい絵だ
個々の景色は昔から優れている

私は若くより世間から離れ
独り静かに志を守ってきた
淡々とした遠くの村に降る雨
さらさらと流れる谷川の水の音
世を離れここに住むようになってもう長くなった
この間の思いはいろいろたくさんある

漫題

環屋幾千山　　屋をめぐって幾千の山
翫山未厭山　　山に遊び未だ山を厭わず
牀頭空壁上　　牀頭空壁の上
又搬畫中山　　又搬ぶ画中の山

漫＝マン　ソゾロニ　なんとなく　　牀頭＝ショウトウ　寝床のあたり
搬＝ハコブ　運ぶ　移す

【訳】

山のこと

家の周りにはたくさんの山々
山を楽しんでいるが山に厭きることはない
寝室の壁にも
絵画の中の山を掲げる

鶴

吾土元無鶴　　吾が土元鶴無し
鶴来更何爲　　鶴来たるは何の為か
世界到處皆羅弋　　世界到るところ皆羅弋（らよく）
因来此土姑游嬉　　よってこの土に来たりてしばらく游嬉す
東溪啄水食魚子　　東渓水を啄（つつ）き魚子を食す
西山擊風宿松枝　　西山風を撃ち松枝に宿す
儘逍遙兮儘自得　　尽逍遙し尽自得す
此土始覺宜避時　　この土初めて覚ゆ時を避けるを宜しきを
歎息吾又避時客　　歎息す吾も又時を避けるの客
曳杖相就弔幽姿　　杖を曳いて相就き幽姿をいたむ
鶴兮鶴兮　　鶴や鶴
世應厭兮禍應慮　　世は厭いに応じ禍いは慮（おもんばか）りに応ず
與汝翺翔入雲逵　　汝と翺翔（こうしょう）して雲逵（うんき）に入る

羅＝ラ　網　　弋＝ヨク　からめとる　　姑＝しばらく　　幽＝ユウ　かすか
兮＝感嘆や強調をあらわす　　訓読ではよまない　　自得＝自分の状態に満足して
楽しむ　慮＝オモンバカル　　翺翔＝コウショウ　鳥が自由に飛び回ること
逵＝キ　道

【訳】

鶴

私の土地にはもともと鶴はいなかった
鶴が来たのは何のためか
世の中あちこちに網をしかけて捕らえようとしている
それでここに来てしばらく遊んでいるのだ
東では谷川で水をつついて魚を食べ
西では山の風を受けて松の枝に休む
辺りを飛び回り楽しんでいる
この土地で初めて時世を避けることのよいことを覚っている
ああ　私もまた時世を避けているものである
鶴よ鶴よ
世は厭なことにも禍にも応じていかなければならない
おまえといっしょに高く飛び立ち雲の道に入りたいものだ

※ここでの鶴は、コウノトリのこと。その頃、コウノトリは青谿書院の周辺をよく飛来し、前の山の松の木には巣作りもしていた。

山中偶題

有客請我字　　山中偶題
我字何能媚　　客有りて我が字を請う
縱横任其意　　我が字に何んぞよくうるわしきありや
歪邪又傾欹　　縱横その意に任せ
醜怪不可説　　歪邪にして又傾欹
姿態眞狂癡　　醜怪説くべからず
即使應君需　　姿態は真の狂痴（もとめ）
徒被世人嗤　　もし君の需に応じしむれば
因是獨羞縮　　いたずらに世人の嗤（わら）いを被（こうむ）る
臨紙故遲々　　是によりて独り羞縮（しゅうしゅく）
願君莫又強　　紙に臨んでもとより遲々とす
吾技果何施　　願わくば君又強いることなかれ
　　我が技果何をか施さん

媚＝ビ　ミメヨシ　歪＝ワイ　ゆがむ　　欹＝イ 斜めにたつ　癡＝チ　おろか

【訳】

山中で

客があって私の字を求めた
私の字などにどうしてうるわしいところがあるか
縦横の線は自己流であり
ゆがみまがっておりそれに傾いている
その醜さは言うまでもない
その形は本当に狂っている
客の求めに応じるなら
それで一人身の縮まるような恥ずかしさだ
紙に向かっても少しも進まない
どうかあなたは又こんなことをさせないでくれ
私の技量では何ができるというのだ

買畫自嘲

閑身一片白雲間　　画を買い自嘲す
早謝塵縁深鎖關　　閑身一片の白雲の間
到底妄心難化處　　早く塵縁（じんえん）を謝し深く関を鎖（とざ）す
傾囊煩買畫中山　　到底妄心化し難き処
　　囊を傾け買い煩う画中の山

關＝関　カン　せき　かんぬき　鎖＝トザス　到底＝徹底　どうしても
囊＝ノウ　袋

【訳】

絵をを買い自嘲する

流れる一片の白雲の中に静かに身を置いて
若いときから世間とは縁をきって門を閉ざしてきた
しかしどうしても迷いの心を亡くすのは難しい
財布を取り出して迷い買ってしまった山の絵

※草庵の趣味は、絵画骨董を鑑賞するのが唯一のことであった。